

学位論文要旨

中国における大学生の学習行動に関する研究
— 「三本大学」を中心にして —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 教育学分野

D193902 呉 彤

問題の所在

本研究の目的は学習行動を切り口とし、中国の「三本大学」¹（中国の呼称であり、ランクの低い大学のことを指す）における大学生の特徴を明らかにすること、および、「三本大学」の役割を検討することである。序章では、「三本大学」を定義し、本研究の目的と課題を明確にした。

まず、なぜ「三本大学」と呼ばれているのかについて説明しておきたい。この呼称の由来は中国大学入試の「グループピング」という特徴（小川, 2019）からである。「中国では、大学入試者は全国統一入試の成績により選抜されており、「その選抜作業は三つのグループに分けて時期をずらして行い、各大学のグループごとに最低合格ライン²を設定し、そのラインを上回る得点を取った受験生が選抜対象になる」（石井, 2014, p.2）。また、中国では、四年制の高等教育機関のことを「本科」と呼ぶため、最も合格ラインが低い第三グループの「本科」という意味で、「三本大学」と呼ばれるようになった。「一本大学」は985工程と211工程を含む「エリート校」である。その一方で、「三本大学」はより低い社会的地位にあるものであり、「お金さえあれば、誰でも行けるだろう」「彼らの卒業証書はただの紙だ」と揶揄され、「三本大学生」は世間からの差別に耐えているとされる（賈, 2014）。

一方で、政策上、これらの大学の多くは民弁大学と呼ばれている。中国では、1999年から高等教育の大衆化が始まり、その担い手である民弁大学が著しい成長を遂げている。2002年の『民弁教育促進法』の公布から現在に至るまで、中国政府は相次いで政策や法規を打ち出しており、民弁大学の発展を支持し、規範的な法律を探り出そうという意思がある。民弁大学は徐々に拡大期に入り、これからも「応用技術型人材」を育成する場として定着していくと予想されている。ところが、公的セクターの大学（「一本大学」と「二本大学」）と比較すれば、民弁大学は未だに劣位に置かれ、公的セクター大学の補足と位置付けられ、「周縁的なセクター」（鮑, 2006）と思われる。

しかし、これらの大学は本当にネガティブな存在なのか。日本では、入試難易度が非常に低い大学に対し、「Fランク大学」「ボーダーフリー大学」「マージナル大学」などといった多様な名称が使われている。山田（2009）は、ユニバーサル化とは「大学大衆化にともなって、別の機能を持った大学が付加されたに過ぎ」ず、「エリート大学は現在も研究大学として残存し、その機能を果たすことが求められている」と述べ、「その一方で、ユニバーサル化によって変化を求められたのはここで示したボーダーフリー大学であった」（p.33）と指摘している。つまり、中国の「三本大学」や日本の「ボーダーフリー大学」のようなランクが低く、選抜性が低い大学は、大衆化が急速に進む中で、公的セクターの大学には見られなかった多様で、新しい役割を果たしていると考えられる。この意味で、「三本大学」は決して、消極的な存在ではなく、社会の変化に対応して現れたものであり、研究の意義が極めて大きいと言えよう。

ところが、中国においては、大学研究の視点は、依然として公的セクターのエリート校に偏っており、「三本大学生」に関する研究の蓄積は十分ではないのが現実である。鮑（2006）は中国における「三本大学」（原文は民弁大

¹ 2015年から山東省や遼寧省や江西省などといった省は選抜の第三期グループを第二期グループに合併し始めた。しかし、「三本大学」という名称が公的には無くなるにもかかわらず、「〇〇学院」などといった特有な言い方で「三本大学」を指す言葉が存在し、一般的にもそのように認識されている。そのため、「三本大学」は実質的には合併後も通称として存在していると考えられる。

² ここでは遼寧省の2012年の全国統一試験の成績（理系）を例として挙げて説明したい。2012年の各ランクの合格ラインはそれぞれ、517点、445点、388点であった。「一本、二本、三本大学」の上線累積パーセントはそれぞれ19%、43%、78%である。すなわち、「一本大学」に進学する学生は成績が省内の上位19%のものである。「二本大学」に進学する学生は成績が省内の上位50%以内の者であり、やや優秀とされるものである。その一方、「三本大学」に進学する学生はおおむね成績が省内で中位、あるいは下位の学生である。

学)に関する研究は強い政策への依存性を持っていると示唆した。「三本大学」に関する先行研究を概観する際にこの特徴が見られる。中国では、「三本大学」に関する先行研究の多くは、政策に焦点を当て、民弁大学の発展や必要性を論じた研究である。そのほか、限られてはいるが、学生の実態に焦点を当てた研究もある。これらの先行研究は「三本大学」の発展やその必要性について検討し、大衆化という背景のもとで、「三本大学」の重要性を強調した。しかし、これらの研究には、依然として三つの問題点が残されている。

第一に、研究の視点が「大学生の進路意識」という研究領域に限られており、「大学生の属性」や「大学での経験」について十分に検討されていない点である。日本では、山田(2010)が指摘しているように、ボーダーフリー大学研究には「ボーダレス・ユニバーシティの現状」、「卒業後の就職とキャリア形成」、「学生の学習行動と学習意識」という三つのアプローチがあった。一方で、中国では、今までの先行研究は高等教育の大衆化がもたらす就職難という社会背景のもとで行われたため、これらの研究が注目したのは「三本大学生」の「進学意識」や「就職に関する考え方」のみであった。それゆえ、そもそも「三本大学生」はどのような家庭の出身者なのか、どのような高校生活を過ごしていたのか、などといった基本的な情報さえも欠如している状況である。

第二に、分析の枠組みが単眼的、一面的だということである。「三本大学生」に関する先行研究の多くは「三本大学」で教授している教師が行ったものであり、調査対象は自分の大学の学生のみであった。そのため、これらの研究を概観すると、いずれも他のランクの大学との比較が行われておらず、分析方法も単純集計にとどまっている。そのため、これらの先行研究では、「大手企業以外が良い」や「とにかく大学院に行く」などのような「三本大学生」の消極的な進路意識を提示しているが、なぜこのような意識が形成されたのかについては看過されてきた。それにもかかわらず、そもそも「三本大学生」が上記のような、より具体的な進路意識が形成される以前に、彼・彼女らの進路分化の意識(就職するか進学するか)がいかんにか形成され、またどのような要素に影響されたのかについてはいまだ解明されていない。

第三の問題点は、「三本大学生」に対する先入観が強く、客観的な視点で分析されていない点である。贾(2014)が「三本大学生」に対する認識は未だに曖昧であり、今までの先行研究は「三本大学生」を誤解させてしまう傾向があると指摘したように、今までの「三本大学生」に関する研究はほぼ「三本大学生」を批判するという立場から行われてきた。つまり、上記で述べたように、「三本大学生」の属性や特徴は未だに先行研究の死角であり、十分に分析されていないにもかかわらず、「三本大学生」に対する偏見を払拭できていないまま、多くの研究が行われている。

以上のような先行研究の三つの問題を踏まえて、本研究では「三本大学生」の特徴を明らかにし、「三本大学」の社会的役割を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するため、本研究は学習行動を軸として、先行研究よりさらに多元的な視点で分析を展開したい。ここで論じた「学習行動」は大学生の授業中と授業以外の学習に関する行動だけではなく、より広範に大学での学びにつながる活動や大学での生活に関わる行動をも含むものである。なぜなら、4年という決して短くはない期間に、大学生は何を意識しながら大学で学び、どのような生活世界を背景として大学生活を送っているのか、これは「三本大学生」を理解するためだけではなく、彼らの視点から大学生が求められている「三本大学」の役割を検討するためにも、非常に重要な意義を持っていると考える。

以上を踏まえ、本研究は上の目的を達成するため、すなわち「学習行動」というキーワードをめぐって、「三本大学

生」の立体像を浮き彫りにするために、次の三つの研究課題を設定した。第1に、今まで「勉強しない、能力がない」と言われてきた「三本大学生」はいったいどのような大学生群なのか、彼ら・彼女らの学習行動はどのような特徴を持っているのかを検討する。第2に、大衆化がもたらす就職難や大学院進学熱という時代の背景のもとで、「三本大学生」はどのような進路意識を持っているのか、またそれが「学習行動」といかに関連しているのかを検討する。第3に、「一本大学生」「二本大学生」と比較することで、「三本大学生」の特徴をさらに浮き彫りにし、多面的な「三本大学生」像を描き出すことである。

第1章 多様化する中国の大学

第1章では、「三本大学」に関する政策を整理することにより、中国における大学の多様化の過程を明らかにし、社会の「三本大学」に対する態度の変容を明らかにした。なお、政府の文書上には「民弁大学」という呼称が使われているため、本章では「三本大学」の代わりに、「民弁大学」という呼称を使うことにした。

分析結果として、まず、政府が民弁大学に対する態度の変化の過程を明らかにした。具体的には、1970年代末に政府は民弁大学に対して「否定」的であったが、1990年代から「黙認」に変わり、2000年代からは「支持」するようになった。さらに、近年に政府は民弁大学の性質を統一し、健康的に発展を拡大させるという意思がうかがえる。

続いて、政府の民弁大学に対する態度の変化の原因について、各時期の時代背景を考慮しながらまとめた。政府が民弁大学に対する態度の変化は、経済の発展や各時期の教育財政の状況と関連していると明らかになった。

最後に、民弁大学の位置付けの変化が明らかにされた。具体的には、2000年代に入る前は、政策的に民弁大学は周縁的なものであり、公的セクターの大学を代替するものと位置付けられたとうかがえた。しかし、2000年代以降、大衆化の進展に伴い、エリート大学は「研究型人才」を育成する機関として、民弁大学は「応用型人才」を育成する機関としてそれぞれ位置づけられることになった。民弁大学はこれからも、政府の支持のもとで、応用技術型人才を育成する場として役割を果たすと期待されている。

第2章 「三本大学」に関する先行研究の射程

本章では、まず、中国における「三本大学」に関する研究をまとめ、その課題及び本研究の視点を提示した。結論を先に述べると、中国の「三本大学」に関する研究は政策への依存性が高く、政策に着目している研究が大多数であり、大学生の視点からの実証的な研究が不足していることを指摘した。最後に、日本における「Fランク大学」に関する研究をレビューすることにより、低ランクの大学を研究する意義を強調した。

第3章 研究の枠組みと調査の概要

本章では研究の枠組みと調査対象校の概要を示した。

分析の枠組みについて、武内（2003）は学生文化の規定要因として「大学の特徵（歴史的伝統、大学の規模、カリキュラムなど）」と「入学してくる学生の特性」と「学生の進路」および、「大学の入学の入学偏差値（ランク）」(p.171)の四つを提示している。この枠組みに従い、本研究では、「三本大学生」の立体像を浮き彫りにするため、「三本大学生」という学生層の特徴、および彼ら・彼女らの学習行動や進路意識を明らかにする。また、それらの相互の関係を検討

するとともに、「一本大学」、「二本大学」と比較する。

アンケート調査は、2018年5月19日から2018年6月8日にかけて、遼寧省にある五つの大学で行った。調査を実施したA大学、B大学を「一本大学」、C大学を「二本大学」、D大学、E大学を「三本大学」に位置付けた。なお、A大学（全国大学ランキングで100位前後）とB大学（30位前後）は985校、211校であり、エリート校とされている。C大学は中堅大学であり、D大学は1999年に設置された民弁大学である。E大学は1999年に設置され、F大学という「二本大学」の独立学院であり、2016年に民弁大学に転換した。

調査対象の概要について、回答者数は1,023名である。有効回答者数は、「一本大学」241名、「二本大学」419名、「三本大学」332名とほぼ同数であり、計992名である（有効回答率97%）。

第4章 大学生の学習意識と進路意識の現状

本章では、調査結果の概要を検討するため、遼寧省³における大学生全体の学習に対する意識と進路に対する意識を概観した。その結果、大学生は積極的な学習意識を持っており、就職よりも進学に対する意識が非常に高いことを指摘した。具体的には以下の通りである。

まず、アンケートの結果だけを見れば、現在の大学生は「真面目」なように見える。「授業中の学習行動」、「授業外の学習行動」と「大学での生活」という三つの部分から、現在大学生が「学習行動」の面で表す特徴について検討した。現在の大学生は授業中「真面目」であり、授業外にも図書館などを利用し、勉強するということが分かった。また、現在の大学生のサブカルチャーとして、ファッションを非常に重視していることが挙げられる。

次に、本研究を通じて現在の大学生が非常に高い進学意識を持っていることが明らかになった。調査の結果、大学生は強い進学意識を持っている一方で、就職に対する意識が低いことがうかがえた。また彼らは「名門学校」に執着し、非常に高熱な進学意識を持っている。

第5章 「三本大学生」の学習行動

本章では「三本大学生」の属性を明らかにしたうえで、彼・彼女らの学習行動に着目し、その規定要因について検討した。その結果、「三本大学生」は「一本大学生」「二本大学生」と比べれば、より低い階層の出身であり、学力も低いことを明らかにした。また、「三本大学生」は従来から言われていた「勉強しない、遊んでばかり」といった「不まじめ」な学生ではなく、授業への意識は非常に高いことが明らかになった。具体的な分析結果は以下の通りとなっている。

また、「三本大学生」の学習意識が高い理由は、「三本大学」が「学校化」していることにあると考えられる。山田（2010b）はイリイチを参照しながら大学の学校化について「大学は学生が主体的に学習する場ではなく、大学が学生を教授し、学生はそれを受容する場」（p.38）になることと論じている。つまり、大学は高校などと同様に与えられた知識を受容する「学校」となっている。この点については、分析結果だけでなく「三本大学」の大学自体の取り組み

³ 遼寧省は「先進地域」とみなされ、2010年の国家統計局のデータを見ると、遼寧省の都市部における一人当たりの所得は全国第9位で、17,717元である。また、大学数で見れば、遼寧省は最も多北京（60校）と二番目の江蘇省（43校）に続き、山東省と同位の40校となっている。2010年の各省の進学率から見ると、最も進学率の高い上海や北京や天津省は続き43%となっている。

からも「学校化」の傾向が見られた。今回の調査対象である D 大学には、「跑操」⁴および「家庭訪問」という行事がある。こうした学生指導のあり方は、大学での学習に対しても行われていると考えられよう。つまり、このような取り組みによって、「学校化された中で、形式的な授業に対する意識」（山田, 2010b）が形成されている可能性も考えられる。

第6章 学習行動と進路意識の関連性

本章では、まず、「三本大学生」の進路意識を明らかにし、上記のような高い学習への意識が進路意識にいかに関与しているのかについて検討した。その結果として、「三本大学生」の特徴について、自主学習への意識が高ければ高いほど、就職志向が低くなり、進学志向が高くなるということが明らかになった。また、彼・彼女らは現在の中国の進学熱を背景にし、大学の取り組みからの影響も受けながら、非常に高いが、受動的な大学院への進学意識を持っていた。

終章 結論と課題

以上「三本大学生」の学習行動を中心に、彼・彼女らの特徴について実証的に分析してきた。本章では、本研究の議論を総括し、主要な知見と本研究の意義、今後の課題について論じたい。

まず、本研究の知見は大きく次の3点にまとめられる。

第一に、「三本大学生」の属性を検討し、「三本大学生」は「一本大学生」「二本大学生」と比べれば、出身階層が低く、学力も低いことを指摘した。

第二に、「三本大学生」はエリートとされている「一本大学生」よりも高い授業への意識を持っていると言える。また、「三本大学」の取り組みを合わせて考えれば、「三本大学」が高校などと同様に、教えられた知識をただ受容するだけの「学校」になっている、いわゆる「学校化」していることを提示した。

第三に、「三本大学生」は「一本大学生」と同様に高い大学院への進学意識を持っていることを明らかにした。また、「三本大学生」の特徴として、自主学習を重視すればするほど、進学志向が高く、就職志向が低いことを指摘した。

以上の知見を踏まえ、本研究の意義は大きく以下の二つにまとめられる。

第一に、複眼的な視点から現在の中国の高等教育に生じた諸問題を考える必要があることである。本研究は大学ランクにより、学生の属性、学習に対する意識や進路意識が大きく異なっていることを明らかにした。つまり、高等教育が急激に発展している現在の中国においては、学生の多様化の時代がすでに訪れている。このような背景のもとでは、大学の多様化、さらに、学生の多様化を十分に考慮しなければならない。しかし、これまでの先行研究で注目されてきたのはエリート大学に限られていた。そのため、多くの学生に関する先行研究に提示された教育の質を高める指導方法はエリート大学生を対象にしたものに過ぎない。「三本大学生」という新たな学生群には必ずしも適切とは

⁴ 学文助時間帯を決めて、強制的に全校の学生を走らせるという活動である。もし、決められた通りに走らなければ、大学学生の名前と専門などの個人情報を入力近くの大きなスクリーンに公表するという懲戒を実施している。

言えない。学力がより低い「三本大学生」には、基礎的な教養を身につけさせ、学力を向上させるとともに、「三本大学生」の現実的なニーズに応じながら、指導方法を探り出すことが望まれる。

第二に、「三本大学」の役割について考察したい。本研究の分析から、「三本大学生」は「三本大学」に「高校」のような役割を求めていることが分かった。具体的には、生活と教育の両面に渡った、いわゆる「学校化」している大学の取り組みの影響のもとで、彼ら・彼女らは高い学習・授業への意識が形成され、人生の第二次の「全国統一試験」、いわゆる大学院入試に対して、高い意識を示しているという。つまり、大学生、あるいは社会から望まれている「三本大学」の役割は、政府の意図している「応用技術型人材を育成する場」から外れていることが指摘できよう。

また、黄（2020）が中国の修士課程の特徴について論じたように、日本の研究大学では、修士課程のことを「博士課程前期」という呼称が使われている。すなわち、「博士課程後期」に継続して研究型人材を育成するのが日本の大学院の目的だと理解できよう。一方で、中国では、このような言い方がなく、修士課程は「完結段階」（p197.）として思われている。また、黄（2020）は修士課程進学者の希望からみれば、専門志向が非常に高いことが提示され、大学院進学希望者は労働市場の動向に参考しながら、進学専攻を決めるという傾向があると示唆した（pp.201-203）。すなわち、中国では、大学院から修了し、仕事をするという考えが徐々に一般的になっている。本研究の結果を含めて考えれば、現在の中国では、労働市場と結びつくという機能を果たす機関として、おそらく大学から徐々に大学院に「移行」していると考えられよう。また、この「移行」はエリート校では、はっきり捉えることが難しいが、ランクが低い「三本大学」では、より明確的に表している。

主要引用参考文献

- 鮑威, 2006, 「中国民办高等教育的生成机制和区域发展模式」『北京大学教育評論』第4卷第4期, pp.149-159.
- 鮑威・文東茅, 2007, 「首都高等教育質量調査報告」『北京市高等教育学会2007年論文集』, pp.3-20.
- 黄梅英, 2020, 「中国における修士修了者の労働市場での評価」『文系大学院をめぐるトリレンマ』吉田文編著, pp.196-212.
- 石井光夫, 2014, 「中国の大学入試改革と学力保証」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第9号, pp.1-15.
- 賈秉权, 2014, 「三本大学生の真实处境与愿望」『西北成人教育学院学报』第5期, pp.75-77.
- 小川佳万, 2019, 「中国の大学入試における募集人員の地域配分に関する省別比較」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第68号, pp.1-8.
- 山田浩之・葛城浩一, 2007, 『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究開発センター。
- 山田浩之, 2009, 「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第58号, pp.27-35.
- 山田浩之, 2010a, 「ボーダレス・ユニバーシティ研究の現状と課題」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第56巻, pp.262-267.
- 山田浩之, 2010b, 「地方大学における学生の学習行動と学習意識-大学の学校化がもたらす学習の形骸化-」『比治山高等教育研究』第3号, pp.37-48.